

呑む

家に来た時のノイは、なにかを噛みたくて、いても立ってももられないという風情であった。手当たり次第に口に入れるのは人間の赤ん坊と同じである。違うのは口へ持っていくのではなく、口の方が目的物に向かっていくことと、なんでも飲み込んでしまうのに適した形状の口をしていることである。

「ボタン位の大きさのものから、ゴルフボール位の物までは口に入れて遊んでいるうちに、なにかの拍子で喉に詰まらせると危険ですから、気を付けてください。」

と獣医さんから嚴重に注意を受けていた。小生、自慢じゃないが物を散らかすのは大のお得意、決して始末のよい方ではない。書齋にゴロゴロしていたゴルフボールを片付け、ついでに、普段は覗かない椅子の後側まで仔細に点検し、転がっていた十円玉もしっかり回収して、ノイ子の受け入れに備えた。

それゆえか、幸いにも家では大した出来事はなかった・・・と、これはふたりが思っているだけで、本当は呆れるような物が、ノイのお腹を通過していったのかも知れない。

というのも、世の中、驚くべきことが常にどこかで起こっているようで、後日、テニスボー

ルを二つも呑み込んでしまって、緊急手術でなんとか一命を取りとめた子の話を聞かされた。いえいえ、ジョーズの話ではありません、可愛いラブラドルの子犬の話である。その子の場合、手術が間に合ったから良かったけれど、なんでもお腹に納めてしまうのが特技のラブラドルのことゆえ、喉には詰まらせなかったものの、放っておいたら腸閉塞間違いなしである。お腹一杯小石を詰め込んでしまった子も実在する。子犬の異常に、呼ばれたお医者さんがその子を抱き上げると、お腹の中で小石がジャラジャラと音を立てたそうである。この子も緊急の開腹手術でなんとか命は取りとめた。パチンコ玉やビー玉のように、引っ掛かりのない形状のものでさえ何処かに詰まる危険があるわけだから、小石は子犬にとって手近な危険物だ。玉砂利を敷いた庭先に、子犬を遊ばせることは避けた方が無難である。

遊んでいる内に呑み込んでしまうばかりでなく、食欲に釣られてお腹に納めてしまった子もいる。なにかくわえてお使いの手伝いをするのが大好きな子だったけれど、持たせて貰った焼き鳥を二串、ビニール袋ごと呑み込んで、十日目に竹串をフニャフニャの状態で排泄した器用な子の話を聞いたことがある。竹串が無事にお腹の中を通過し終えるまで、毎日毎回、排泄物を調べながら、気を揉んでいた飼い主の気苦労は察するに余りある。

考えてみれば人間だって、うっかりしていると、あらゆる物を呑み込んで目を白黒、というのはそう珍しいことでもない。よく聞くのは、入れ歯を呑み込んでしまった話だ。呑んでしまっ

た人が、先ず第一に心配するのは、入れ歯の両側にニョツキリと突き出した丈夫な金具が胃腸を傷付けるのではないかという点だろう。

「大丈夫。お腹は立派な芸術家。普通なら食べ物の繊維質で綺麗に包装された形で通過させますから、出てくる迄トイレの後に注意して回収してください。」

なんて歯医者さんに言われてひと安心。自分のお腹が、普通に・・・多少下手であっても・・・、芸術家であってくれることを願いつつ、次に心に掛かるのは、「回収」した物件を、再び口の中で使用するか否かの経済にかかわる問題であろう。

犬のお腹も人間と同じく、少々の物ならばその芸術活動でカバーが効くようだが、開腹手術となるとかわいそうだし、犬は健康保険が効かないから、経済的にも大変である。くれぐれも開腹手術なんてことにならないように御用心！御用心！

噛む

「これはなにか安全に口に入れ、噛んで遊べるものを買ってやらねばなるまい・・・。」
ということで、スペイン製とか言う、チョコレートの匂いを染み込ませた、キュッキュツと音の出るゴム人形のいくつかと、靴の形をしたガムやミルクボーンなどを買って来た。ノイは、どれも大いに気に入ってくれた。しかし、ガム類は驚くほどのスピードで胃の腑に納められて

しまい、ノイはその後で美味しそうに大量の水を飲む。お腹がパンクするのではないかと心配になった。原料がなんであるのか正確には知らないが、からからに乾いた牛皮を丸めたようなガムも、かちかちのミルクポーンも、お腹の中で水分を吸ったら何倍にも膨れあがるはずである。おとなになるにつれて、無茶苦茶には食べなくなったから、今でこそノイのおもちや箱には、おりおりに貰ったガムの類が山積みになっているけれど、子供のときはそうはいかない。与えられたものに真剣に取り組むのは、ラブラドルの好ましい性格の一つでもあるが、ガムやミルクポーンに関しては裏目に出る。食べ過ぎて、数時間後に吐いたことがある。その時の苦しそうな顔を見ると、それを貰ったときの嬉しそうな姿を差し引いても、与えてしまった罪悪感は拭えない。したがって、ガム類はそう度々与えられずに駄目。

発育期には、カルシウムも豊富だし、遊びもかねて楽しめるかと、本物の牛骨を水煮にして与えたが、ノイは、これにも目がなく、舌なめずりして受け取ると一心不乱。牛骨は咬み割った先端が鋭利にとがるので、消化されるまでに胃腸を傷付けはしないかと心配になり、豚骨の水煮に変えてもみたけれど、これはいずれも失敗であった。ノイの体重が、あれよあれよという間に増えてしまったのである。

硬骨魚や鶏の骨は、口、喉、胃腸などに刺さって危険だから絶対与えてはいけなないと、これも獣医さんからきつく注意されていたので、刺さることばかりに気を取られていたのだった。

どうやら、ノイには蓄財本能が欠如しているようだ。よそ様の柴犬などを見ると、貰った骨は、一度に食べてしまわずに、穴を掘ってしっかり隠して置いたりするようだが、ノイは、子供の頃から現在に至るまで、穴を掘って何かを埋めたり、物陰に持ち込んで隠したりといった行動をしたことがない。骨は髓の所がことのほか美味しいらしく、尻尾をゆらゆらさせながら、カリカリ、バリバリ噛み続ける。根気のよさも抜群だし、歯も強い。それによって、顎もより強く鍛えられるのはよいけれど、脂肪分の多い髓は肥満につながるので要注意である。ノイの胃腸は極めて効率良く機能しているらしく、身体は食べる物の量や質に呆れるほど敏感に反応を示す。

すらりとスマートなドーベルマンみたいな体型は、ラブラドルのものではない。胸は厚く深く、脚はがっしりと逞しく太く、どんと重量感のある存在がラブラドルである。痩せたラブラドルほど貪相なものはないが、ぶくぶく太らせてしまうのは、さまざまな病気を招く原因になる。生後六か月位まで引き運動は禁止だから、広い草原などで自由に駆け回らせて、
・・といっても、どうしても運動量は限られるから、カロリーオーバーには気を付けなければならぬ。

遊 び

人間だって犬だって、知能の発達している奴ほど、ただぼんやりと時を過ごしてはしない。遊ぶのが上手な奴は、勉強もできるし仕事もできる。リゾート地のプールサイドでグラス片手にデッキチエアーにひっくり返って、のんびり海や空を眺めて暮らしたいという願望は、日頃の多忙があつてのことだろう。

人間の管理社会の中に、否応なしに取り込まれた生活を強いられている犬たちには、食べ物を採し獲得するという生存に結び付いた、基本的な喜びや悲しみを伴う仕事さえ残されていない。かくて、現代の犬たちは、概して暇を持てあます。「いぬ」の語源は、ある説によれば「居(い) + 寝(ぬ)」だそうで、寝るのが商売みたいだけれど、夜行性で日暮れとともに起き出し、獲物を獵った昔はいざ知らず、夜も人間のタイムスケジュールに合わせて寝るのが普通の生活になった今、そういうも寝てばかりは居られない。

「ねえ、ねえ、あれ、なーに？ それ、どうするの？」

人間の子供なら口がきけるが、犬はその代わりになんにでも鼻先を突っ込んでくる。なんでも臭いを嗅ぎ、噛み心地で納得する。子犬はみんなそうだろうが、ノイときたら、それに一回りも二回りも輪がかかっていた。われわれが係わりをもつ総てのものに、興味津々なのである。といつて、こちらにもいろいろ都合がある。大事な物まで噛み心地を納得して買われて

は困るのだ。興味を示すものを、みんな「駄目」で取り上げてしまつては、ストレスも溜るだろうし、その内「どうせ駄目なんだ」と無気力にもなるだろう。呑み込んで大事に至る恐れがなく、噛み心地を楽しめ、デブにならないように食物ではなく・・・となるとノイの遊び心を満足させ得る物は、なかなか見つからなかった。

買ってきたゴム人形は、何時もくわえて歩いていたけれど、ゴムが良質で噛んでも引っ張っても破れない。良いことなのだが、ノイの破壊本能を満たすという点では不向きだった。人間だつて時には思いつきりなにかを振り回したり、整然と並んでいるものを破壊したくなるものだ。ボーリングやドミノ倒しが人気を呼ぶゆえんであろう。一杯いけるくちならば、ストレス解消にアルコールで気を紛らせることもできるけれど、犬はそうもいかない。

ある日、ウイスキーの箱をさげて帰つたら、ノイが例によつて鼻面を突き出して来たので、ホチキスが使われていないことを確認して空き箱を与えてみたら、これは大喜び。まだ子犬だつたノイの口では、簡単にくわえて歩けないところがまたよいらしく、隅の方をくわえて投げ上げたり、振り回したり、「貰っちゃった貰っちゃった」と女房殿の所へ見せびらかしに行き、最後は前足と口を上手に使って引き千切り、総てが小さな破片と化すまで、満足そうに取り組んでいた。散らかつた後始末は大変だけど、ああ面白かつたという顔を見ると、この破壊活動は、充分にノイの遊び心を満たしたようである。これに馴れて、与えない箱まで手当たり

次第に噛み破り、ストレス解消をされては大変と最初はちょっと心配した。だが、「貰う」という動作の所からが、この遊びの導入部であり、「わあ！ 壊れたの！」とか「凄い散らかしようだねえ！」とか、「この切れ端頂戴よ。」などと言われながら、家族の見ている中での破壊活動が楽しいらしい。その証拠に、留守番をさせておく時に、退屈だろうと与えておいた空箱は、いつも帰ってくるまで同じ姿をとどめていた。

留守番の間は、ただひたすらに家族の帰りを待ち望んでいるらしい。ワンワン鳴いて叫んでも、誰も来てくれないと分かれば、留守番が多少長引いても、ワンとも言わずにじっと待ち続けている。悪戯も、その楽しみの多くは、人間との係わりにあるらしい。連れて行ってくれると思ったのに留守番をさせられた時など、ティツシユを全部引っ張り出してみたり、屑籠の中身を部屋中にぶちまけてみたりもするが、これは完全な嫌がらせで、叱られるのを覚悟の上の抗議行動である。叱られるという状況の中にも、家族との係わりを持ちたい節がある。「鬼のいぬ間の洗濯」という諺は、どうやらノイの辞書には載っていないと分かってから、空き箱ドリビリがノイの遊びの一つになった。日永一日待ち望んでいる散歩にしても、家族が同行せず、遊びに来た人だけが連れ出そうとすると、いつもの方向に勇んで玄関を出はするものの、十層も行かないうちに四肢を踏ん張ってストライキ。

「それじゃ、お家へ帰るの？」

と聞くと、Uターンして動きだすらしい。庭で木戸を開け放しにしておいても、ノイはひとりでそこから出ていこうとはしない。たまあーに出ても自分の家の境界を右左点検すると戻ってくる。リードを離れたが最後、何処かへすっ飛んで行ってしまい、青くなって探し回ったり、捕まえるために追い掛け回す苦勞とは無縁である。

ノイはボール取りが大好きだ。散歩の途中いつもの広場にさしかかると、

「ねえ、やろう、やろう。」

と催促する。見事にきまったノイのジャンピングキャッチを、見物人もやらせてみたくなるらしく、時折、自分にも投げさせてと強引に志願する人がいる。だが、これらの人々は投げたボールをすぐ自分で拾いに行く破目になる。よその人の投げるボールに、ノイはほとんど興味を示さないのだ。しらっとした顔でボールの行き先だけをチラリと確認して、後は知らん顔である。落下してバウンドし、転がり、イレギュラーするボール自体がノイの興味の対象であった時期は、子犬の頃のごく短い期間に過ぎなかった。ノイは明らかにボールという道具を仲立ちとして、ふたりとのやり取りを楽しんでいるのである。ボールを投げる構えを見せると、投げ手がどちらを向いているか確かめ、それが落下すると予測される地点に向かって、一目散に駆けて行く。たまに女房殿が投げてやることもある。球技不得意の彼女の球は、とんでもない方向に飛び、あんれ！と驚くほどの至近距離に落下する。だから、女房殿がボールを手

に取ると、ノイはほんの五呎程の距離で、

「どうせこちら辺でしょ！」

という顔で立ち止まり、女房殿を嘆かせる。ノイは高くバウンドしながら自分の前を飛んで行くボールを、ジャンプして捕るのが特に大好きで、思い通りの捕球ができた時など、満身に笑みを溢れさせ、足取りも軽く尻尾をゆっくり輪を描くように回転させながら戻ってくる。その姿は、二死満塁の大ピンチに、強打者の放った一発を、フェンス際ハイジャンプの好プレーでキャッチしたスタープレーヤーのごとくである。かといって、ノイは、決して女房殿の投げる凡球を馬鹿にしたりはしない。ちよろっと行って捕ってくると、彼女の前にぼんと投げ出し、

「また投げて！」

とせがむのである。五回、十回、二十回。途中休憩のときは二つのボールを前に伏せをして呼吸を整える。

「楽しくって、楽しくって……」

その間も尻尾はひっきりなしに左右に揺れ続ける。数えたら、一分間に百二十回の割合だ。そんな時、顔見知りの犬がやって来ても気を取られることはない。

「今、ボール遊びやってんの。だからあなたとは遊ばないわよ。」

という視線を送るだけ。中にはボール好きな子がいて、投げたボールを横取りして行くが、そ

れにもノイは怒らない。

「二つあるからいいもん。気が進まないけど、一つ貸してあげる。」
といった顔。ボール自体に、そういった意味での執着心はないのだけれど、

「さあ、今日はこの位にして帰ろうね。明日またやろう。」

と帰り支度にかかった時は、「明日、また遊ぶ」ためのボールが、二つともすっかり自転車の籠の中に納まるまで、じっと目を離さない。ボール投げの後、汚れたボールを水道で洗い、ノイは喉を潤すのだが、ある時、傷んだボールをそのまま公園の屑籠に捨て、次の日、新しいボールを補給するのを忘れたことがあり、以来、どうも信用を失ったようである。

「大丈夫、ちゃんとしまっておくからね！」

ノイの目は、水を飲みながらもこちらの手元を監視し続けている。

ボール投げは、ノイのリクリエーションとして、精神的にも肉体的にも有効に効果している。しかし、ボール投げにも気を付けなければならないことは沢山ある。子犬の時期は、特に、ボールを追ってどこへでも、我武者羅に飛び込んで行くので、目や脚などを傷付ける恐れのある敷の中や、車の通る道路に、間違ってもボールが飛んで行かないようにしなければならぬ。また、コンクリートなどで舗装された場所や、砂利の敷いてある場所でのプレーは脚腰を傷めるので禁物だ。土や砂がむき出しの場所も、ボールがすぐに汚れ、その汚れはたちどこ

ろに口に入る。草原であっても、切り株やガラスの破片が落ちていたり、凸凹のある場所は脚を傷める危険が大きい。傾斜のある地形の場合は、坂上から坂下にボールを投げ降ろして捕らせてはいけない。下りの駆け足はつんのめるので危険が多い。逆に多少の傾斜地なら、駆け上がるのはよい運動になる。ボールをくわえて帰ってくる時には、ゆっくり帰ってくるものである。ゴルフ場のような芝生が理想的だが、これも除草剤などが散布されている場合は、劇薬に近い農薬が、涎でびしょびしょになったボールを介して口に入るから大変危険である。

ボールの硬さにも注意がいる。柔らかすぎるボールはすぐに穴が開いてしまうけれど、硬すぎるボールは避けなければいけない。まだ幼かった頃、ノイはうっかり舌をしまい忘れて、ボールをキャッチしてしまい、血に染まったボールをくわえて帰って来た。噛み切ってしまった舌先は、未だに小さな切れ目を残している。また、ボールの投げ方を誤って、ノーバウンドで正面からダイレクトにキャッチするような状況が生じると、大切な歯を折ったり欠いたりすること間違いなしである。バウンドして勢いがそがれた球であっても、正面から口で受け止めるには相当の圧力があり、ノイはこちらの不注意から下顎の犬歯の先を欠いてしまった。歯髄がかすかにのぞき、人間ならひいひい言って痛がるだろう。早速、獣医さんに相談したが、欠けてしまった歯はいかんともし難い。ホーロー質が、露出した歯髄の部分を自然にカバーしてくれるまで待つ以外ない。知人の歯医者さんは、「欠けた部分の補修はやってあげてもいいけ

ど、すぐまた欠けそうだから、却って自然にホーロー質のカバーができるまで待つた方が良いかも・・・」ということで、かわいそうにノイはしばらくの間冷たい水がしみるらしく、その歯に触らないように水を飲んでいた。ごめんね！ ノイ。

犬族は瞬発力が抜群だ。けれど、一目散にボールを追うのは激動である。食後、お腹がこなれないうちにボール捕りをさせたり、さんざん駆けた後、息使いが荒いうちに、欲しがるからといって水をガブガブ飲ませるのも避けるようにしている。考えるまでもなく、何れも人間に良くないことは、犬族にもよいわけがないということである。

こわーい（病気と予防）

近頃、巷で「こわーい」もの一つはエイズだが、これはなにやら人間社会だけを汚染しつつあるのではなく、猫社会では五十％近い確率で広がっているらしい。中国語では、エイズを愛滋病と書くそうで、これは名訳だが、わが犬族と猫族は、同性・異性を問わずそのような恐れを伴う愛し方はしないから心配ないだろう。「こわーい」のはこれが血液に触れて感染する恐れのあることだ。多くのラブドールは猫族を目の敵にしないけれど、何かの折りに傷付けられたり、傷口を嘗められたりしたらどうなるだろう。猿がこの病気の源で、猫族も感染するとなれば、犬族もその恐れがあるのだろうか？ 早速獣医さんに問い合わせたら、幸い犬族は

この病気とは無縁のようだ。やれやれ、一安心。

既に知られた、犬族にとって「こわーい」病気も沢山ある。可愛くて犬を家族にしても、意外に病氣のことや、その予防については知らないという人が多い。今や、幸いなことに日本では狂犬病は発生していないそうだが（外国にはまだまだその例を見る）、法で決まっている注射だから、これさえやっておけば大丈夫と思っっている極端な人さえおいでになる。かくいう小生だって信頼できる獣医さんと知り合うことができ、ノイが家に来るまでは同じようなものだった。無知ゆえに、可愛い家族を悲劇的な運命に陥れては大変である。「無知は罪悪」とばかり、知らないことや疑問に思うことは、獣医さんに納得のゆくまでしつこく尋ねたり、文献を読みあさって調べたりもした。その結果、分かったことは、「こわーい」ものとはいえず、それに対する薬剤の開発も目覚ましく、飛躍的に犬の寿命を伸ばすことになったものも少なくないということだ。

しかし、世の中に良い薬がどれほどあつても、それをもっとも適した方法で使用しない限り、「猫に小判・豚に真珠」も同然である。いや、薬は反面毒でもあるわけで、使い方次第でとんでもないことにもなりかねない。薬自体だって「こわーい」のである。

§フィラリア症

犬の病氣というと、よく知られているのが「フィラリア症（犬糸状虫症）」である。しか

し、それが実際にどんな病気なのか、犬糸状虫なる憎つき虫がどんな生態を持っているのか、知っている人は少ない。この病気で死んだ一匹の犬の心臓から取り出した虫を見せて貰ったことがある。ソーメン状の気持ち悪い奴が、コップ位の瓶の中にびっしりと詰まっていた。この虫の先ず第一の形態は、小さな子虫（マイクロフィラリア）で、犬の血液の中を遊動しながら、三年位も成長しないままで生きている。アカイエ蚊・ハマダラ蚊・トウゴウヤブ蚊などという中間宿主となる蚊が、マイクロフィラリアを含む犬の血液を吸うと、蚊の体内に入ったマイクロフィラリアは約二週間で成熟した子虫になる。その成熟子虫を持った蚊に刺されると、成熟子虫は犬の体内に侵入し、約三か月後には心臓に到達、その後数か月で十五〜三十疔の細長い成虫になる。犬の体内では、心臓の右心室・肺動脈などの血管に群がり住むから、血液の流れが阻害され、多数が寄生すれば心室は肥大し、肝硬変・脳貧血など引き起こす。成虫は五年位生きていて、雌は年がら年中マイクロフィラリアを産み続け、それは血液中を遊動するから話のもとに戻って増え続ける。フィラリアが犬の体内に入ったん入ってしまったら、これを駆除するのは大変困難だ。不治の病と思っただ方が、現在のところよさそうである。それだけに、フィラリアを体内に宿している犬は珍しくないから、蚊に刺される可能性がある限り、フィラリアに取り付かれない方がおかしいことになる。新聞によれば「日本では年間四十万匹近くの犬がこの病気で死んでいると推定されている。」それで、「日本は世界でも有数の流行地

。「なのだそうだ。

蚊の体内で「成熟した子虫」が、百羽に近く可愛いわが子の体内に侵入してくるものなら、なんとかか奴を殲滅して成虫にさせないようにしなければ、取り付かれた子自身も危ないし、その子の体内で生まれたミクロフィラリヤを蚊に提供することとなり、他の子をも危険にさらすことになる。

体内に侵入した成熟子虫を殲滅する薬は、現在何種類か発売されている。ただ、その多くは毎日、もしくは隔日に五月中旬から十二月中旬（「成熟した子虫」が成虫になるまでの期間は百八十日位なので、体内に入ってしまった「成熟した子虫」を殲滅するためには、蚊を見かけなくなつてから二か月近く必要になる）まで、飲ませ続けなければならない。これらの薬は劇薬だから、一回の分量は正確にその子の体重に適した量でなければならず、飲ませるのを忘れてしまつたり、面倒くさいから明日の分もやっておこうというわけにはいかない。可愛い子のためならばその労を惜しむなんてことはできないはずだが、薬をやるのを忘れても、「成熟した子虫」が成虫になるまでは、犬に別段の変化も現れないので、あまり気が咎めずに中断してしまつたりする人もいるようだ。また、厄介なことに「成熟した子虫」に対する薬と、成虫に対する薬は同じではない。成虫になつてしまつたフィラリヤを持つている犬に、「成熟した子虫」用の薬を飲ませると、ショック死する場合があるから、これらの薬の投与は慎重の上にも

慎重を期して、信頼のおける獣医さんに指示を仰いで行うべきである。初めてフィラリヤの薬を飲ませる時や、途中で薬を飲まない期間があった場合、獣医さんに血液検査をして貰い、ミクロフィラリヤが血液に見られるかどうか調べなければならぬ。

毎日飲ませるのはうっかりしても大変だし、手もかかるということで、最近は一か月に一回の投与で大丈夫という薬が発売されている。このタイプにも何種類かがあり、心臓にかかる負担の少ないものもあるということで、これに変わる方も多いようだが、これも与え方は獣医さんの指示を仰いで慎重にしないと危険なことは同じである。毎月、獣医さんを煩わせるのも大変なので、わが家では五月にその年の分をまとめていたしておく。月に一度となると、毎日よりかえってうっかりしやすいものだが、薬と一緒にカレンダーに貼り付けるシールをくれるので、これを貼っておけば忘れることもない。お陰で、ノイは元気である。

§ 又ハルボウイルス感染症

ハルボは一九七八年にアメリカで発見され、あっという間に世界に広がった。犬のポックリ病といわれる「こわーい」伝染病だ。たった今まで元気だった犬が、突然嘔吐や下痢を始め、時に血便をし、急激に衰弱して間もなく死ぬ。発病すればウイルスに効く薬がないので、確実な治療法もないと言われていた。しかし、最近はこのにも有効な薬が開発されたと言う。早い手当てが必要だが、朗報である。ハルボの死亡率は極めて高く、子犬は特に危ない。伝染する

力が非常に強く、病犬の嘔吐物・排泄物に大量に含まれたウイルスは、生体を離れた後も長期間伝染する力を失わず、熱や乾燥にも強く、普通の消毒薬では死滅しない。だから、この病気で死んだ犬のいた場所に別の犬を近付けるのは危険極まりない。間接的に人間や器材に付着したウイルスからも伝染する。

新しい病気だが、幸い、これには免疫力の強いワクチンがある。子犬の時二回以上注射、後はワクチンの有効期間によって追加免疫の接種をする。日本でも近年大流行を見た病気だから、予防注射を続けるのを絶対忘れてはならない。

§レプトスピラ症

これも、体長五〜十五ミクロンのレプトスピラ原虫に寄生されて起こる「こわい」病気だ。消化器官を犯されるカニコラ（発熱・嘔吐・出血性下痢が続いて数日で死亡。）と、肝臓・腎臓をやられるイクテロヘモラギア（溶血性黄疸が表れ、尿の量が減り十日位で尿毒症を起して死亡。）の二種類があり、両方を併発することも多く、人間にも感染する。この原虫に寄生されている鼠や犬の尿、その尿の付着した物をなめることで感染する。この原虫を持った「保菌犬」は多いそうだから、散歩の時にやたらに他の犬を嗅がせたり、他の犬の尿やその跡をなめさせたりしないよう、また、鼠がドックフードに近付かないように注意が必要だ。

§ジステンパー

ウイルスによる伝染病で、幼犬病ともいわれる。名前の通り主として二才以下の犬が犯される。恐しいのは神経症状をていするタイプで、初期のうちなら命は取り留めても、後遺症（頭や口をピクピク動かししたり、脚を震わせる）が残ることが多い。

§ 伝染性肝炎

これもウイルスによる伝染病だ。成犬より子犬の方が多くかかる。ジステンバーと併発することも多く、症状も似ている。潜伏期間は三〜五日で、高熱・衰弱・脱水症状・下痢・嘔吐・肝臓肥大・結膜炎・角膜の汚濁などを起こす。急性のものは、子犬だと二〜三日で死んでしまう。

ジステンバー・伝染性肝炎・レプトスピラ・パラインフルエンザ・バルホなどのこわい病気には、七種混合ワクチンという便利な予防接種法がある。子犬を家族に迎える場合、仔犬が母乳から貰う移行抗体が切れる前にする、このワクチン接種を繁殖者がきちんと済ませているかどうか確認すること。仔犬のときの予防接種は、数回にわたって行わなければならないから、仔犬を引き取ったら、早速、これからお世話になる獣医さんに相談して、次回の予防接種の時期を確認しておくことである。成犬に成ってから一回のワクチン接種を忘れてはならない。獣医さんによって、どんなワクチンをどう使うのが一番有効か考え方も違うから、信頼のおける獣医さんに最善の方法を選んで貰うことである。

その他、§糖尿病、§結核、§瘰癧から、§齒槽膿漏や§風邪、§ノイローゼにいたるまで、人間にある病気はすべて起こり得る。わが家では、獣医さんに、いろんな病気に対するできる限りの予防策を講じてくれるように頼むとともに、受けた注意はしっかり守るようにしている。そして、常にノイの状態に目を配り、もし異常があれば早期に対処している。それに慣れたのか、今では何か具合が悪いところがあると、ノイは目で訴える術を覚えたようだ。

- 元気がない
- やたら水を飲みたがる
- 毛の艶が無くなった
- 局部的に毛が抜ける
- 毛を噛む
- 鼻汁が多く膿が混じる
- 吐く回数が多い
- 三日以上も便秘が続く
- 便や尿に血が混じっている
- すぐ息切れする
- 呼吸の様子がおかしい
- 食欲不振が続く
- 食べている量は同じなのに痩せた
- 脱毛が甚だしい
- やたら痒がる
- 皮膚にでき物や発疹が出た
- 噛んだり飲み込んだりしにくそうにしている
- 吐いた物に血が混じっている
- 下痢が続く
- 排便排尿の回数や分量や色がおかしい
- 咳が続く
- まぶたや舌が血の気を失っている

○よろけるような歩き方をする

○急に倒れる

○ひきつけを起こす

○耳が臭い

○耳だれが出る

こんな状態は、何れもどこか異常な証拠である。早いところ獣医さんに診て貰うのが良策だ。早ければ早いほど、病気は軽く済むものである。

医食同源

ノイは、食欲の秋！にやって来た。そのせいでもあるまいが、それはそれは食いしん坊である。与える物は文句もいわずに何でも食べる。独特の臭いの正露丸さえ食べてしまうほどだから、われわれの手からなら、たとえ毒でも呑みくだしてしまうことだろう。ただし、ノイの名誉のためにいっておくが、拾い食いは絶対にしない。

身体ができあがってから、朝夕の食事はドックフードに馬肉の薄煮。昼のおやつは、犬用の粉ミルクを溶いて牛乳を混ぜたのに、犬用のビスケット。毎日毎回同じ物でも誰かさんみたい

に、
「また、これーっ！ 同じだ、食べたくない。」

なんていわないから、その点大いに助かっている。目下、ノイの垂涎の的は、散歩の途中に

覗き見たワンちゃんが、美味しそうに食べていた「残り御飯に味噌汁かけ」であることは分かっている。しかし、食べた結果は歴然とノイの身体に表れるだろうから、いくら涎を流されても迂闊に与えるわけにはいかない。お腹が張るばかりで、犬の腸では消化吸収に無理のあるお米や、塩分いっぱい味噌汁は、犬の健康に大敵だ。

「品質の良いドックフード。極端な話をすれば、それと水さえ必要充分なだけ与えていれば、余計なものは与えない方がよい位ですよ。ミルクは犬用の粉ミルクを。人間の普通の牛乳は成分が違うから、子犬の内は避けることです・・・」

どうも、ノイに甘く、何でも欲しがるままに与えてしまいそうに見られたのか、獣医さんは最初の注意の中で、確りと釘を刺された。子犬の時にバランスを崩すと、成犬になってから直しようのない弊害を残すことも多い。

良質のドックフード。それからしてが難しい。ピンからキリまでさまざまだ、タイプもドライ有り、モイスト（半生）有りで、種類も多い。最近では、新しくペット産業へ進出して来る業者も多く、新製品の宣伝も人間用の食品に劣らず華やかである。

犬だって毎日必要な栄養分を、過不足なく偏りなく、人間とは構造の違う犬の胃腸に、過分の負担がかからないように調理して貰えるなら、それが一番に決まっている。人間だって、健康に暮らすためには、一日に三十種類の食品を摂らなければならないといわれている。昔のよ

うに大家族主義で、調理する人も多く、さまざまなお惣菜が食卓にいらんだ時代は別にして、核家族化した現代の家庭で、それはとても難しい。まして、犬が必要とする食品と、人間用とは同じではない。最愛の？亭主一人のためにだけでさえも、毎日のこととなれば頭を悩ませ、買い物に行き、台所で苦勞している女房殿を見ると、犬用の炊事を人間と別にするのは、とても長続きしはない。

ドッグフードを基本にした食生活を選ぶとすれば、まさしくフードは良質でなければならぬ。フードを選ぶ時に一つの目安になるのは品質内容の表示だが、例えば、それが同じ蛋白質とあっても、何の蛋白質であるかが重大問題だ。牛・馬・羊・鶏・魚・鯨・カンガル―・乳製品・卵から、大豆などの植物性のもので、果ては石油製品まで蛋白質には違いない。だから蛋白質何パーセントで安心はできないのである。その蛋白質の質が悪ければ、犬の胃腸は消化吸収することができず、負担ばかりかかって栄養不足。いたずらに排泄物が山をなす。中国に「医食同源」という言葉があるが、食べ物の善し悪しは健康状態に必ず響く。毛の艶が悪くなったり抜け毛が多くなるなどは、栄養不良の典型的な例である。人間なら「食は広州にあり」とか何とかいって、時には中華料理なんか食べにも行けるけれど、犬の場合「食は飼い主の手にある」のが現状である。食を委ねられている以上、それは慎重に選択してやる義務があるはずだ。

脂肪分も気を付けなければいけない。多過ぎると皮膚にも悪いし、足りないとカロリー不足になる。与えようとするドッグフードに含まれている脂肪の質や量にも気を配る必要がある。そのドッグフードが良質かどうかは、今までの実績に頼るほかない。

参考までに挙げておくと、今の日本では「ヒルズのサイエンスダイエット」、または、「ザアイムス カンパニーのユーカヌバ」「ベディグレイチャム」などが、実績の在るフード、信頼できるフードといえるようだ。幼犬用・成犬用・母犬用・老犬用・活動犬用など、それぞれの向きに合わせた内容の物が用意されている。他のドッグフードと較べるとメーカー希望価格は高く設定されているが、価格破壊ばやりの現代のこと、電気製品並みのダンピングをしてくれる業者も少なくない。ただし、いくら安くても、製造年月の古いものは変質している恐れがあるから避けたほうが良いし、大量に買い込むのも、消費しきるまでに虫がついたり、変質の恐れがあり、これも避けたほうがよい。最高とされるフードを使っても、多少割高になる程度だし、具合が悪くなってお医者さんにかかる費用を考えれば、むしろ安上がりと言えるだろう。

食物の与え過ぎは良くないけれど、足りないのはもっと悪い。「肥った犬の飼い主は飼方が上手なのだ。」という考え方も成り立つのである。乾燥したフードばかりでは、こちらの目から見ても味気なさそうだし、乾燥状態の食品ではなんとなく不安である。そこで、わが家では

新鮮な乳製品や肉類を、ノイの食生活に加えてやることにした。馬肉は、冷凍にした一キロ詰めのパックをフード屋さんから仕入れ、さっと火を通して殺菌したものである。馬肉や牛肉の赤身は蛋白質が豊富で脂肪が少ない。また、生肉は活性酵素が含まれているが、煮過ぎると養分が失われ、消化も悪くなる。これは人間も食欲をそそられるほどうまそうな臭いを漂わせ、ノイは大いに気に入ってくれた。フード屋さんには、牛や馬の肉ばかりでなくレバーなど種々の内臓なども用意されているから、栄養状態に合わせて選択することができる。値段は一キロ千円程度で、一週間くらいで消費する量である。ただし、最近では狂牛病なんてこわい病気も流行っているようだから、ペット用として売られているものには不安な点も生じている。嫌な世の中である。

人間用と犬用のミルクの内容を見比べると、成分が逆になっている。犬用のミルクが良いのは、脂肪や蛋白質の必要量が、犬に合わせて適切に配合されているからである。ノイは、犬用の粉ミルクを溶いたものより、普通の牛乳の方を好む。しかし、牛乳は飲み過ぎると便が柔らかくなるので要注意だ。仕方がないから、わが家では、半々位に割ったもので手を打つことにした。

食べれば歯が汚れる。というわけで、

「ノイノイ、こっちいらっしやい。歯磨きですよ。。。ゴシゴシゴシ。。。はい。良

「子良い子。お休みなさいね。また明日！」

人間のほうは面倒臭くなって、時に歯磨きをさぼるけど、ノイは、自分で歯ブラシもお口くちゆくちゆもできない。虫歯や歯槽膿漏になってお口が臭くなったらかわいそうと、女房殿の始めた歯磨きが、今ではすっかり習慣付いて、忘れて寝ようとするど、

「あれ。まーだ？ もっと何か食べんのかな？」

といった顔をする。獣医さんに頼めば、麻酔が必要という歯石取りも、口の中を触られることに馴れたおかげか、大体のところは家で済ませられるようになった。歯石も放っておくと「こわーい」ことになるのは人間と同じである。

「いいな！ノイすけ。僕なんか誰かに歯磨きして貰ったことないんだから・・・！」

お散歩

ノイは小さい頃からお散歩が大好きだ。特に子犬のうちは何にでも興味津々の野次馬根性も旺盛だから、珍しいものに出会うのは面白くて仕方がないらしい。成長するに従ってそうでもなくなるが、子犬は何にでも鼻面を触れてみる。尻尾をゆーらゆーらさせながら、野原でクンクンやっている様子はそれだけで微笑ましい。だが、そこにも危険は一杯だ。

危ないもの一つは、他の動物の排泄物である。その中には回虫・鞭虫・鉤虫条虫・トキソ

ブラズマ・エキノコックスなどなど、「こわーい」寄生虫の卵や原虫、ウイルスが含まれていることがある。排泄物が乾燥しても、微粒子状の危険物は近づいてクンクンやる鼻息で舞い上がり、犬の体内に入ってしまう。猫の排泄物はトキソプラズマ・ゴンディという原虫の感染源になることが多い。「君子危きに近寄らず」、ばつちい物には近付けない。

周りでもやかくいうわけにもいかないのだが、ノイはなぜか、うらぶれた感じの日本犬の雑種君が好みのタイプであるらしい。散歩の途中、そんな子に出会って大喜びで遊びたがる。成長過程で、別にそういったタイプの犬と特別親密な関係があったわけではない。誰かを好きになるのに理由なんかいらぬけれど、迂闊に誰でも好きになられると、こちらとしては大いに当惑する。衛生管理がきちんとなされている犬同志であれば、組んずほつれつ駆け回ろうが、身を擦り寄せて親愛の情を示し合おうが、そんな恐れはないけれど、衛生管理に欠ける子の場合には、往々にして蚤・シラミ・ダニ、時には、かいせんや真菌類といったありがたくないプレゼントをしてくれる。蚤は犬につきものと思っている人も多いが、血を吸われて痒いだけではない。犬糸虫やチフス菌は蚤によって媒介、住血原虫のピロプラズマはダニによって媒介され、それらは犬を死に導く。水虫・しらくも・たむし等とはほぼ同じ菌類による皮膚病は、犬の身体でも治り難くしつこい。厄介な代物なのである。ノイよ、お友達になるなら清潔な子とね！

ダニのいそうな地域に連れて行ったときは、帰ったら仔細に点検する。特に、足の裏のくび

れた溝の中や、指の股の割れ目・まぶた・耳の裏側といった辺りは毛をかきわけて丁寧に見てやる。しっかりと頭を皮膚の中に喰い込ませた憎つきダニは、血を吸って赤黒く地肌に紛れて見付け難い。ダニの生息地は、山や田園地帯はいうまでもなく、東京のような大都会にまで広範に拡がっている。

蚤やダニに関して、ノイはまだ処女である。危険だからといって、大だい大好きな散歩や、ときには郊外のピクニックに連れて行って貰えないとすれば、

「わたしや死んだほうがましだあ！」

と、ノイは悲鳴を上げるだろう。危険はどこにだってざらに転がっている。人間の世界だって危険、危険また危険。うっかり地下鉄にも乗れない時代。恐れているのは道路も歩けない。人知を尽くして危険を避けながら、皆なんとか生きている。人間の場合には何が危険かを知っているように、ラブラドールには何が危険かを知って対処してやりさえすれば、大概の危険は避けられる。

地面からの距離が近い所を歩く犬族は、コンクリートの道路などでは、照り返しを一段と強く受けるし、黒いノイは、陽が照っていれば効率よく太陽光線を吸収してしまうから、夏など暑い時間のお散歩はご法度だ。犬も日射病にかかる。ぐったりしたり、血尿をしたりの症状はその兆候だ。もしもの時はすぐに涼しい所で休ませることである。ノイの夏の散歩は日がとつ

ふりと暮れてからである。夜の公園は静かで、人も少ない、心地好い夜風のもとで心ゆくまでボール投げをする。冬は、逆に日向ぼっこをさせないとビタミン類の欠乏を招く。犬は日光浴でビタミン類を生成する動物らしい。それが分かっているのかどうか、ノイは、朝御飯が終わると、伸び上がった窓から外を覗く。

「もうそろそろ、日が照ってる筈なんだけどな……。」

庭にぼかぼか陽が差し始めると、そこでお昼のミルクタイムまで、時折青空を見上げながら、のんびりお昼寝をきめこむのが、彼女の好みのパターンなのである。

ただいま

お散歩から帰ると、蒸しタオルで全身を拭き、足を綺麗に洗ってやる。異常があればそこで気付くし、清潔にしておけば皮膚病にかかる確率もずっと減る。

犬嫌いな人の中には、「その臭いがたまらない」からという人が結構いるものだ。「可愛いいね!」と撫でる掌がべとべとになり、あまりにも動物的な臭気が鼻を衝いたのでは、どんな愛犬家だって癖々だ。人間だって十日も風呂に入らなければ、ルンペンさんと同じ臭いになってしまう。入浴の機会の乏しかった平安の昔「香の道」が発達し、体臭の強い西洋では香水が発明された。源氏物語の貴公子「匂の宮」のような、体臭イコール芳香という特異体質は別に

して、負けじと薫煙を焚き込めた「薫の大将」が普通であろう。愛しい人の体臭に特別の愛着を感じるのは、好みの問題で異議は挟まないけれど、「おお！シヨセフィーヌ！」はナボレオンだけに任せておきたい。

子犬の間はタオルにじゃれつき、袖口を咬んでは、叱られ叱られ拭かれていたノイも、今では気持ちよさそうに目を細めて尻尾を振っている。

週に一度はシャンプーをしてやる。犬の飼方の本などによく、入浴は二〜三週間に一度。シャンプーし過ぎると毛質を傷めるといったことが書いてある。けれど、ラブラドルは他の犬種に較べると、本来、水獺を得意とするだけあって、油脂分の多い毛質をしているから、すぐべとついてくる反面、一週間に一度のシャンプーでも毛が傷む恐れはない。もちろん、充分に栄養を摂っている健康な子の話だ。

湯上がりのノイは、今日もちよつとシャンプーの硫黄の残り香を漂わせて色っぽい。濡れた身体は、乾いた清潔なバスタオルでしっかり拭いてやる。ドライヤーが使えればよいのだが、ノイはドライヤーが大嫌い。当然のことながら全身毛だから、入浴後は二枚のバスタオルと一枚のタオルケットを必要とする。耳にフツと息を吹き掛けてやると、ブルブルブルンと、頭から尻尾の先まで器用に身体を震わせ、大部分の水気を弾き飛ばしてくれるから、先ずタオルケットを全身にかぶせるようにして、顔と両耳を一番最初に、次はお尻の辺りから下腹

の部分、タオルケットでくるむようにして拭いてやると、落ち着いてくる。その後、前脚、後脚の順に荒拭き、一枚のバスタオルで仕上げ拭き。二枚目はベットの上に敷く、胸や腹の部の水分が吸い取られるまで、伏せをさせておくためである。皮膚の柔らかい下腹部や、足の裏のくびれ、指の股といった場所は、洗った後、特に丁寧に水気を拭き取っておく。湿度が高い季節は特に、ジクジク濡れたまましていると皮膚病になりやすい。

「ノイちゃんは、どうしてお耳が臭くないの！」

とよく聞かれる。身体を清潔に保つていても耳が原因で臭い場合がある。泳いだりシャワーを浴びたりした後は、耳の周りや裏側を柔らかい布で良く拭き取ってやるが、綿棒などで中まで掃除はしない。耳の中はとても柔らかいから、うっかりすると傷が付く、外耳炎になる。耳の掃除用には外耳炎の薬にも使えるよい点耳液がある。わが家では獣医さんに分けて貰って常備し、臭うなどと思ったらすぐ入れてやる。スポイトが付いているから、一〜二滴耳の中に落とし、耳の付け根を外からくちゅくちゅ揉んでやる。ノイは気持ち良さそうにしている。点耳液が中の汚れを流し出してくる二〜三日の間、気を付けて拭き取ってやるだけで、臭い犬とはさよならである。

散歩から帰ったら、爪も点検する。土や草原ばかりを歩ける恵まれた子は爪が減らないから伸び過ぎ、コンクリートの上を多く歩かなければならない子は、割れたり欠けたりしているこ

とがある。伸び過ぎのまま放っておくと指が開いて掌の形が悪くなり歩き方が変になるし、傷付いた爪は手当てしてやらないと悪化する。ちよつとした外傷の薬は獣医さんに貰って常備しておくことである。緊急の場合は人間用でも充分役に立つ。爪を切る際には細心の注意が必要だ。犬の爪には血管が通り、神経も通っている。切り過ぎると血が出るし、痛がってかわいそうだ。そんなことをして爪切り大嫌いな子になったら大変だ。地面に当たらない前足の蹴爪もちゃんと伸びてくるから、これも忘れないで切つてやる。三日月みたいに蹴爪は伸びる。物に引つ掛かつて爪を割ることになったり、肉に食い込んでかわいそうなることになる。爪の黒いノイは、特に中が透けて見えないから、最初はどれくらい切つたらよいか分からなくてまごついたので、獣医さんに切り方を教えて戴いた。爪の形が形だから、ギロチンみたいな専用の爪切り道具も買つてみたが、人間用の大型の爪切りか、ペンチ型の爪切りで、中心を残すように回りの堅い部分を削り落とすように切つてやる方が安全である。そうしておけば、中心部は歩いているうちに適当にすり減つて丁度良い長さになる。ジョイナス選手みたいな長い爪はラブラドルには似合わない。

肘のたこについてもよく聞かれる。ノイは、十歳に成つた今も肘にも脚にもたこはできていない。こまめな手当てのおかげである。肘や後脚の擦れ易い部分は、日頃から注意してチェックが必要である。初夏の換毛期にその部分の毛が薄くなっていたら、たこになる前兆だ。早速

手当てが必要である。セリーングリーンを十倍に薄めた液を作り、脱脂綿に付けて、その部分をごしごし擦り、終わったら水気を良く拭き取り、角質化した皮膚が取れて敏感になった肌に、雑菌が入らないように軟膏を擦り込んでおく。少なくとも一日に一回は手当てを続けることである。三日坊主では効き目がない。ちなみに、この十倍液は、人間の肘の角質化した部分に使っても効果を示す。夏の間は小間目に手入れをしておけば、冬には、たこにならずに綺麗に毛が生えてくる。

たこを防ぐためには、何時も好んで伏せている場所に、クッションなど柔らかい物を敷いてやる。コンクリートの床に何時も伏せているなんていうのが一番いけない。ラブラドールは、ふわふわが大好きである。

「この広告のムートン安い！ 私見てくる！」

買い物には慎重で腰の重い女房殿が、ノイのベットシートツ用にと、狙っていた獲物を見つけて飛び出していった。自分のために何かを用意して貰うのが「だーい好き」な、ノイのダイナミックに喜ぶ姿を楽しみに、今頃はためつすがめつ鼻歌混じりに品定めをしていることだろう。

「ラブ イズ ザ スプレングー シング……」 やがて寒い冬が来る。どの子もみんな元気だね！